
高校生回顧録

エナカ ユイリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生回顧録

【Nコード】

N2242BA

【作者名】

エナカ ユイリ

【あらすじ】

奥村飛鳥。独身、玩具会社社員。彼はある日、母校が廃校になると同級生から聞かされた。そして彼は高校時代を振り返り、今の自分を見つめ直す。

俺、高校時代のあだ名『復刻大臣』にかけて最後の仕事をします。

第一話

母校が廃校になる。と俺と同じく高校の近くに住んでいる宮地大みやじまやしろから聞かされた。

二つ向こうの駅の近くにある高校と合併するらしい。たまたまコンビニで会ったからヤツに聞いても実感が無い。もちろん、驚いた俺の一番思い出深い場所の役目が終わるのだから。けれど廃校まであと二年もあるという。

そつえば、十年ぐらい高校に行つてないな。

俺は、来年の文化祭は一緒に行こうと宮地に言つて帰った。

あの頃、何に熱中していたらう。何が流行っていたらう。そう帰る道中車内で思い出す。

○
- - - - -
- - - - -
○

夏休みが終わり、二学期が始まるうとしていた。
生徒の気は緩み、頭の色や耳にピアスなど夏休み前と様子が変わっている者が多数いる。

奥村飛鳥おくむらあすか。名前の割に男。十六歳。海里ヶ丘高校二年三組。帰宅部。

得意なこと無し。親友と呼べる人二名。
最近ハマっているモノ、古いモノ。

皆、彼を『復刻大臣』と呼ぶ。

「大臣おはよ」

飛鳥に声をかけたのは、親友その一の宮地。
遅刻ギリギリで始業式の会場、体育館へ向かって走っている。

「おい宮地、間に合うのか？」

「大臣、お前も歩いていないで急げよ」
「確かに」

二人は走ってクラスの列に入る。

もつと時間に余裕を持って来いとクラスの整列の責任者、評議委員に軽く怒られた。

お昼頃、下校。

部活のある者は即座に部室へ。

宮地は飛鳥に別れを告げて男子テニス部の部室へ行く。

「男テニ、明後日休みだから遊ぼうな！」

とも言っていた。

「俺がバイトだから無理だわ」

「マジか…」

落ち込む宮地の背中寂しかった。

「二人とも忙しそうで。大臣、帰るよ」

そして今、飛鳥に声をかけたのが親友その二、はやしだけいすけ林田慶輔。通称、リンダ。学年の中ではかなりのイケメン。いつも冷静だが、時々尖った態度に豹変する。

「おう」

「今日、ステップの発売日だから立ち読みに行こうよ」

「そうだな。先週のツーピースやばかったよな？」

古いモノオタクの俺、運動バカ宮地、トンガリキャラのリンダの三人組。これが俺たちにとってのいつものメンバーだった。

この頃、あんな複雑な関係になってしまふとは思わなかった…。それは文化祭前、俺が彼女と別れてから始まった。

第二話

「ごめんね、でもこれから仲良くしてね」

俺は彼女のその言葉を聞き、自分の中で何かが壊れるような衝動に陥った。

今でも覚えている。

たしか、放課後の図書室でだった。

「おい、なんだよそれ！」

静かな図書室に飛鳥の声が響き渡る。

「五月蠅い。まだ人生長いんだから私よりも合う人に出会えるよ」

それ以上何も言わず去る彼女の背中見ながら持っていた本を机に乱暴に叩きつけた。

打撃音は悲しい余韻を残すだけ。

スクールバック片手に飛鳥は、とぼとぼ図書室から出ていく。

小学校の時の初恋の彼女に高校入ってから告白うして、付き合ってた、デートして……

早い三カ月だったと飛鳥は思い返す。あっさり別れすぎて未練がありすぎる飛鳥。

ゴミ箱の前で財布の中のプリクラを捨てようとするが捨てられない。

「どうしたん？」

時々訛る口調が特徴のリンダが飛鳥の顔を心配そうに覗き見る。

「どうしただって？それはアイツに言ってくれよ」

弱々しく答える。

「あつ、俺な傘忘れたから取り来たんだ」

お前がここにいる理由はどうでもいい。
話を聞くなら聞くでちゃんと聞け！

飛鳥はそう思いつつも放っておく。

「でアイツって？何があつたかちゃんと説明してみ」

とりあえず彼女と別れたとだけ言う。それ以上の説明はなににもない。

「ホントかそれ」

「本当だよ」

「えー、結構お似合いだと思っただけ」

「だからコクられた時、断ったのか？」

リンダはかつて飛鳥の元彼女に告白されたことがあった。その時はあっさりと断ったと飛鳥は聞いている。

「違う。だって白石だぞ。今まで何人と付き合ってるって噂があったことか。そんなコロコロ変えるやつとなんて絶好無理だね」

「……」

「そんな落ち込むなよ。復刻さん顔は普通だし、身長あるし。見た

目には問題無いからいつかはモテキが来るよ」

「そうかな」

「そう」

飛鳥はプリクラを握り潰して捨てた。

彼女と決別するために。

「これで俺と白石は元通りの友達だ」

宮地は部活の練習中、後輩の沖とテニスコート^{おき}の自転車置き場で失くしたボールを探している。黄色くて目立つはずなのに、自転車の下を見ても見つからない。

「おかしいな……」

「先輩、もしかして俺たち間違ったところさがしてます？」

「いや、そんなはずはない！ 沖くん、そっち探شというて」

「分かりました」

おかしいなと独り言を言いつつ、探し続ける宮地に誰かが声をかけてきた。

「マサ、これ」

振り返ると幼稚園からの幼馴染。

「彩ちゃん^{あや}、ありがと。今帰るところ？」

「うん」

「一人？」

「まあ、いろいろとね」

彼女は、白石彩。しろいしあや

リンダに断られ、飛鳥と付き合い別れた宮地の幼馴染。

白石はバイバイと言って帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2242ba/>

高校生回顧録

2012年1月14日19時50分発行